

ルカによる福音書 9 章 1-27 節 「神のキリスト」

1A 十二使徒による宣教 1-17

1B 世俗人ヘロデの反応 1-9

2B 群衆への世話 10-17

2A イエスの正体と使命 18-27

1B 群衆と一線を画した告白 18-20

2B 受難と弟子たちの生き方 21-27

本文

ルカによる福音書 9 章を開いてください。今晚は、私たちキリスト者が立っている信仰告白の部分学びます。「イエスが、神のキリストである」ということです。この告白によって教会が成り立っています。この告白によって、どんな時代においても、どんな場所においては、キリスト教会が存続してきました。私たちはこのことを告白するために、集まっているといっても過言ではありません。イエスの宣教の働きの分岐点となる重要な出来事を読みます。

1A 十二使徒による宣教 1-17

1B 世俗人ヘロデの反応 1-9

9:1 イエスは、十二人を呼び集めて、彼らに、すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威とお授けになった。9:2 それから、神の国を宣べ伝え、病気を直すために、彼らを遣わされた。

私たちはこれまで、イエスがガリラヤ地方において神の国を宣べ伝えてこられた記述を読んできました。その中で、この方の教えが貧しい者に届く恵みの福音であり、さらにこの方の言葉に権威があることを、病人を治したり、悪霊を追い出したり、死者をよみがえらせたりすることによって示されました。私たちが、イエスの御言葉に服従する時に、この方の力が働き、そこに神の国が臨むことを学びました。

そしてついに、イエス様はこの力と権威を十二使徒にお授けになります。イエス様は宣教の始まりで、弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選びました。なぜ十二人なのか？それは、神がイスラエルを十二部族という単位で選ばれたことに通じます。神は世界に対してイスラエルをご自分の光を示すために選ばれましたが、今やイエスをキリストだと宣べ伝える使徒たち十二人を選びられることによって、神の国を臨ませるようにさせておられました。私たち教会は、この使徒たちの教えを土台にして、イエス・キリストを礎石として建て上げられています。

イエスは単独でご自分の働きをされなかったことに注目したいです。この方には、これまで見て

きたように全能の神の力が働いています。けれどもイエスは、弟子たちと共に過ごし、弟子たちがご自身の働きをするようにお任せする形で、神の国を拓げようとしておられるのです。したがって、今も私たちは同じです。誰か一人が活躍して福音が伝わるのではありません。キリストに献身する者たちが交わることによって、そこから福音が広がっていきます。

「すべての悪霊を追い出し、病気を直すための、力と権威」とありますが、前回私たちは、子の力の現われの究極の姿を見ました。レギオンを追い出して、豚の群れがガリラヤ湖になだれ込み、溺死した出来事がありました。次に、ヤイロの娘が死に至る病で、事実、死んでしまったのにイエス様はよみがえらせました。けれども、イエス様が弟子たちに与えられた使命は、「神の国を宣べ伝え」ることです。教会の使命は、貧しい人に施す、病の人に近づくこともありますが、主な目的は神の国を宣べ伝えることです。「宣べ伝える」というのは、宣言することです。そこに力と権威があります。多くの人が、理解しなければ伝えられないと言います。理解すること、説明することが主な目的ではありません。むしろ、理解はその力、現実に触れることによって与えられるのです。神の国という、神の支配の中に人が入ることによって、神の栄光を知ります。

さらに、「病気を直すために」と付け加えられています。使徒の働きにおいて、使徒たちであることを示す徴が、病を直すなど、奇跡を行なうことがありました。使徒パウロがこう述べています。「使徒としてのしるしは、忍耐を尽くしてあなたがたの間でなされた、あの奇蹟と不思議と力あるわざです。(2コリント 12:12)」

9:3 イエスは、こう言われた。「旅のために何も持って行かないようにしなさい。杖も、袋も、パンも、金も。また下着も、二枚は、いりません。9:4 どんな家にはいっても、そこにとどまり、そこから次の旅に出かけなさい。9:5 人々があなたがたを受け入れないばあいは、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落とすなさい。」9:6 十二人は出かけて行って、村から村へと回りながら、至る所で福音を宣べ伝え、病気を直した。

主は十二弟子たちに、宣教の働きをする時の具体的な指示を与えられます。3 節には、旅において身軽でありなさい、ということです。主が、福音の働きをする時に備えを与えてくださるから、その備えが与えられることを信じて行ないなさい、ということでもあります。かつて、主がイスラエル十二部族を選ばれた時も、荒野において食べるものも、飲むものも、その旅において主が備えてくださいました。彼らは、ヨルダン川を渡って約束の地に入る直前まで、不足することはありませんでした。同じことを行ってくださいます。

この命令がそのまま、今も実行しなければいけないのかというところではありません。イエス様が捕えられる前に、弟子たちにこう言われました。「それから、弟子たちに言われた。「わたしがあなたがたを、財布も旅行袋もくつも持たせずに旅に出したとき、何か足りない物がありましたか。」彼らは言った。「いいえ。何もありませんでした。」そこで言われた。「しかし、今は、財布のある者

は財布を持ち、同じく袋を持ち、剣のない者は着物を売って剣を買いなさい。(22:35-36)」ご自身が罪に定められるので、弟子たちからいなくなります。ですから、身の周りのことや身の安全については、自分で整えなさいというイエス様の配慮をここで読むことができます。

ですから、文字通り従う必要はありませんが、しかし、宣教の働きに関わるように命じられるということは、自分の必要や備えについて主に頼り頼むことによって、自分を身軽にするということが大切です。数多くの福音宣教の働きが、ごく一部の生活の必要を携えた宣教師らの働きによって始まっています。そして主が備えられ、主がご自分の力を証しし、それから目で見える形でその働きが整えられるのです。初めから何かを整えて、それで働きをしようとするのは企業経営の手法であっても、宣教の手法ではありません。主に導かれている人は、誰でも何らかの形で、エリヤが鳥によって養われる、やもめによって養われるという経験をします。

そして生活の必要だけではなく、人々の反応についても身軽でなければいけないことを主は教えられます。福音を伝えて、人々がどう受け入れるかについて、その結果も主に頼らなければいけません。御言葉を受け入れる人がいれば、その人の家に留まります。そして御言葉受け入れなければ、足のちりを払い落します。それは、自分が福音を伝えたのだから、その責務は果たしたのだから、あなたがたが受ける神の裁きについて、私はその血の責任はないということです。

私たちも、同じ姿勢で福音を伝えなければいけません。決して、自分がその人を救うなどと思っではいけません。けれども、いつの間にかそうなってしまいます。主がご自分の御言葉を広められるのであり、人々の心にその言葉を植えつけ、実を結ばせてくださるのに、自分自身が努力することによって植えつけられると思ってしまう。

しかし私たち福音宣教者は、警官が制服を身につけているようなものです。制服を身につけている数トン級の大型トラックを停止させることがあります。しかし、それを自分自身にトラックを停めることができると思って、私服で出ていったら轢き殺されてしまいます。人の救いについては、らくだと針の穴を思い出すとよいでしょう。イエス様は、「金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。(マルコ 10:25)」人を救うのは、神のみができることです。

9:7 さて、国主ヘロデは、このすべての出来事を聞いて、ひどく当惑していた。それは、ある人々が、「ヨハネが死人の中からよみがえったのだ。」と言い、9:8 ほかに人々は、「エリヤが現われたのだ。」と言い、さらに別の人々は、「昔の預言者のひとりがよみがえったのだ。」と言っていたからである。9:9 ヘロデは言った。「ヨハネなら、私が首をはねたのだ。そうしたことがうわさされているこの人は、いったいだれなのだろう。」ヘロデはイエスに会ってみようとした。

6 節にあるように、弟子たちが村から村へ福音を宣べ伝え、病人を治していて、それでヘロデが反応しました。弟子たちがイエスの御名によって、これらのことを行っていたので、弟子たちの名

ではなくイエスの御名が広がっていたのです。そこで、ヘロデはひどく当惑しました。彼はヘロデ・アンティパスで、当時、ガリラヤ地方を統治していた国主です。かつて父ヘロデ大王は、東方からの賢者がユダヤ人の王を拝みにやってきたと聞いた時に、自分ではない者が王権を現しているということに恐れをなし、それでベツレヘムにいる二歳以下の男の子を惨殺したように、アンティパスも、バプテスマのヨハネの預言の言葉に恐れをなし、今はイエスの力と権威の現われに恐れをなしているのです。

人々は、イエスについていろいろなことを言っていました。一つは、バプテスマのヨハネのよみがえりです。ヘロデが殺したのですから、これは恐ろしかったです。もう一つはエリヤの現われです。旧約聖書の最後の預言は、主の来られる日の前にエリヤが現れることでした。そして、「昔の預言者のひとり」というのは、おそらくモーセの後に出てくる、彼のような預言者のことです(申命 18:15-19)。したがってヘロデは、「この人は、いったいだれなのだろう。」と言いました。これが、今日の学びの中心になります。イエスが行われてきた数々の奇蹟は、この方は誰なのだろうという疑問を生じさせるものでありました。そしてまさに、それがイエスの目的でした。イエスが行われていることによって、イエスが誰であるかを知ることが目的です。

数多くの人々が、自分の生き方について、「自分がいかに生きていくか」ということを目的にして、キリスト教に近づきます。イエスのように、自分も人に親切にして生きていきたいという願いを持ちます。しかし、キリスト教は自分探しの宗教ではありません。そのような人は必ずつまずきます。福音書では、後で、金持ちの青年が来ます。「どのようにすれば、永遠のいのちを持つことができるか。」とイエスに尋ねてきましたが、「どのようにすれば」と言って、自分が何をすればよいのかということに注目していました。彼は悲しい顔つきになってイエスから離れていきましたが、自分探しはつまずきます。そうではなく、「イエス探し」をするのです。この方は誰なのか？という質問を、自分の生きる時の最大の疑問にして生きているかどうか？ということです。

そして、「ヘロデはイエスに会ってみようとした。」とあります。ヘロデは求道をしているわけではありません。不純な好奇心と、恐れとが入り混じっており、イエスを殺そうという政治的思惑もありました。13章 31-32節にこうあります。「ちょうどそのとき、何人かのパリサイ人が近寄って来て、イエスに言った。「ここから出てほかの所へ行きなさい。ヘロデがあなたを殺そうと思っています。」イエスは言われた。「行って、あの狐にこう言いなさい。『よく見なさい。わたしは、きょうと、あすとは、悪霊どもを追い出し、病人を直し、三日目に全うされます。』」イエスは、ヘロデのことを「狐」と呼ばれています。かなり強い蔑称を使われており、ヘロデという政治家であり俗物から離れ、ご自分の使命を話しておられました。

そしてついに、ヘロデはイエスに会うことができます。けれども、イエスは何一つ奇蹟を行われず、一言も口を開かれませんでした。それでヘロデはイエスを侮辱し、嘲弄して、はでな衣を着せて、総督ピラトに送り返しました。イエスは、ヘロデに対しては次の言葉を実践されたのでしょう。

「聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたを引き裂くでしょうから。(マタイ 7:6)」

2B 群衆への世話 10-17

9:10 さて、使徒たちは帰って来て、自分たちのして来たことを報告した。それからイエスは彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。9:11 ところが、多くの群衆がこれを知って、ついて来た。それで、イエスは喜んで彼らを迎え、神の国のことを話し、また、いやしの必要な人たちをおいやしになった。

ルカは、十二弟子たちを「使徒たち」と言い換えています。使徒とは、「遣わされた者」という意味ですが、彼は使徒の働きを後編として書いています。ですから、ルカが福音書で記している、使徒たちの働きが、そのまま使徒たちが行っていったものとして意識して書いています。

そしてイエス様は、「彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。」とされています。ベツサイダとは、ガリラヤ湖の北東にある町です。その町を北上して、ずっと行くとピリポ・カイザリヤがあります。そこに「ひそかに退かれ」ました。人々がご自分のことを誰であろうと言い始めて、その領土の国主さえその疑問を抱いたのですから、イエスは弟子たちにとっても大切なことを話さなければいけない時期になってきたことを意識されています。

そしてまた、弟子たちに休みを与えたいという思いもおありだったでしょう。イエスの権威と力によって大きな働きをしました。そこで大切なのは休むことです。主との密かな交わりを持つことです。ワーカホリックは靈的に危険です。イエス様は後に、悪霊どもを追い出した弟子たちが戻ってきた時にそれを喜ばれましたが、「ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。(10:20)」とされました。自分自身が主のものだとされたことを、ただ喜ぶこと。主の家に住まい、その麗しさを眺めること、このことが最上の喜びであることを確認する必要があります。

けれども、群衆がやってきました。ここでイエス様は、「喜んで彼らを迎え」ておられます。これが、イエス様の必要を求めてくる者たちを喜んで迎え入れられました。私がある兄弟とこの前、関わったのですが、その人を初めて顔を見たのは、チャック・スミスが来日した時のことです。チャックが一つの分科会で話した後に、ある人が内容とは無関係のことを話しました。そして随行している通訳者が、「関係のないことは質問しないように。」と注意しました。そして次にその人の番になりました。そして話し始めると、「関係ない質問は受け付けられないと言ったではないか！」と諷めたのです。覚えていますが、その人は決して無関係なことを質問したのではないのですが、それでちょっとした口論になったのです。その通訳の牧師は、チャック・スミスを先生と見なしていました。先生を守ろうとしていたのですが、チャックはそうではないのです。イエス様に倣っていました。群衆が近づいてくるのを、喜んで迎えたイエス様と同じように迎えたかったのです。

9:12 そのうち、日も暮れ始めたので、十二人はみもとに来て、「この群衆を解散させてください。そして回りの村や部落にやって、宿をとらせ、何か食べることができるようにさせてください。私たちは、こんな人里離れた所にいるのですから。」と言った。9:13 しかしイエスは、彼らに言われた。「あなたがたで、何か食べる物を上げなさい。」彼らは言った。「私たちには五つのパンと二匹の魚のほか何もありません。私たちが出かけて行って、この民全体のために食物を買うのでしょうか。」9:14 それは、男だけでおよそ五千人もいたからである。しかしイエスは、弟子たちに言われた。「人々を、五十人ぐらいずつ組にしてすわらせなさい。」9:15 弟子たちは、そのようにして、全部をすわらせた。9:16 するとイエスは、五つのパンと二匹の魚を取り、天を見上げて、それらを祝福して裂き、群衆に配るように弟子たちに与えられた。9:17 人々はみな、食べて満腹した。そして、余ったパン切れを取り集めると、十二かごあった。

ベツサイダの付近にある野原であったので、イエス様は十二人の使徒たちに、福音宣教師としての訓練を与えられました。先にイエス様は自分自身の必要について、備えがあることを教えられましたが、自分たちの仕えている人々の必要も、自分たちを通してイエスが備えてくださることを教えようとされました。ちょうどイスラエルの民にマナを与えられたように、群衆にも与えようとしているのです。

弟子たちは、群衆たちを解散させなければいけない。そして、それぞれに食べる物を探してもらわないといけなかつたと思います。彼らがそこにいる人々の必要を満たさなければいけないという義務感は正しいです。主の働き人としてなければいけない資質です。けれども、イエス様は「あなたたちで、食べるものを上げなさい」と言われます。それは、弟子たちができないことをしなさいということではありません。イエス様は、弟子たちを通してご自身が彼らの必要を満たそうとされているのです。イエス様は続けて、群衆に神の国について聞いてほしいと願われました。けれども、弟子たちがイエス様の言われることを聞いて、その指示にしたがって弟子たちの手を通してそのことを行なわれようとしておられるのです。

それで持ってこさせて、圧倒的に少ないパンと魚の数で事を行われようとする。ですから、私たちは聖霊に導かれて、今、自分の持っているものを捧げることによって主がそれを増やして下さることを期待しないといけません。ここで大事なのは、イエスの指示によって弟子たちが行ったということです。聖霊の導きがあるからこそ、人々はイエスに献身することができ、また必要なものも与えられるという信仰が与えられます。聖書には、「主を試してはならない」という戒めがあります。ちょうどイスラエルの民が、四十年荒野をさまよわなければいけないと主に言われたのに、「それでも、とにかく行ってみよう。」と言って、カナン人のところに入っていきこうしました。すると、こてんぱんにやつつけられました。数多くのミニストリーが、主の導きではなくて、主を試すことによる無理のある計画を立て、実行しています。

イエス様ご自身が父なる神に願いました。感謝し、パンを裂き、御父をほめたたえ、それで配りま

した。魚も同じようにされました。イエスが父なる神に頼っている姿を見て、弟子たちもイエス様に頼っていくことを学びます。そして、そこからどんどん増えて、群衆に与えることができます。群衆はお腹いっぱいになりました。

それであり余ったものを集めると、かごが十二になりました。使徒たちが一人ずつ、そのかごを持っていたのでしょうか。彼らが群衆をイエスを主とし、この方の指示によって治めたのです。イエス様は、ここに後に来る神の国の姿を見せたのではないかと思います。「ルカ 22:30 それであなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食事をし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」イエス様は天から地上に戻ってこられて、その神の国において十二使徒を再興されたイスラエルを治める座に着かせてくださいます。

2A イエスの正体と使命 18-27

1B 群衆と一線を画した告白 18-20

9:18 さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいっしょにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」9:19 彼らは、答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。」

イエスと弟子たちは、ようやく独りになることができました。他の福音書によれば、ピリポ・カイザリヤに一行がいることがわかります。そして、ルカによる福音書には何度となく出てくる、「イエスがひとりで祈っておられた」とあります。イエスが人として神に頼りながら生きておられた姿を伺うことができます。人が神に祈るとき、そこには神のかたちに造られた人間性が回復しています。

そして、弟子たちに対して、ヘロデが考えて悩んでいた質問をぶつけられます。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」しかしイエス様は、ここで敢えて「群衆は」と強調されています。群衆が考えるのは、イエス様が生き返ったバプテスマのヨハネ、あるいは預言者エリヤ、そして昔の預言者のひとり、でありました。群衆と弟子たちの違いがここで浮き彫りにされています。エリヤも、バプテスマのヨハネも、またもうひとりの預言者も、現状を打破し、この地上に回復と復興をもたらす預言者であります。そのような切迫した状況の中で主が復興をもたらす器として、イエス様を見上げていました。イエス様を非常に深く尊敬していましたが、それ以上ではありませんでした。イエス様は、預言者以上の方だったのです。

9:20 イエスは、彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えて言った。「神のキリストです。」

旧約聖書に約束されている、神の選ばれた油注がれた方、メシヤです。この方は、単に深い尊敬をしているのではなく、あがめるべき方、礼拝すべき方、服従し、仕えるべきお方です。偉大な

預言者であるモーセと、この方との違いを見てみましょう。「出エジプト 3:13-15 モーセは神に申し上げた。「今、私はイスラエル人のところに行きます。私が彼らに『あなたがたの父祖の神が、私をあなたがたのもとに遣わされました。』と言えば、彼らは、『その名は何ですか。』と私に聞くでしょう。私は、何と答えたらよいのでしょうか。」神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところへ遣わされた。』と。」神はさらにモーセに仰せられた。「イスラエル人に言え。あなたがたの父祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、主が、私をあなたがたのところへ遣わされた、と言え。これが永遠にわたしの名、これが代々にわたってわたしの呼び名である。」主はモーセに、「わたしはヤハウェである」と言われます。「わたしはある」というのがこの方の名前です。イエスはユダヤ人たちに、「アブラハムの前に、わたしはあるのです」と言われました。ここでイエス様は、モーセに語っておられる主として現われておられるのです。

群衆よりもずっと近いところにいた弟子たちには、イエスが預言者のような働きをしているけれども、それ以上の方であることを直感的に知りました。イエスは実に、これは天からの啓示であるとペテロに言われました。

2B 受難と弟子たちの生き方 21-27

しかし、ここから弟子たちにとって辛い、試練の時が始まります。イエスがキリストであることを知った彼らは、この方によってついに預言が成就し、キリストの御国が地上で立てられると信じていました。まさにその約束の方がここにいらっしゃると思い、イエスと共にいました。ところが、これまで表してくださったイエス様の力と権威とは裏腹に、その力を敢えて行使されず、ユダヤ人たちの拒絶を受けることを語られるのです。

9:21 するとイエスは、このことをだれにも話さないようにと、彼らを戒めて命じられた。9:22 そして言われた。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

ここの「命じられた」という言葉は、軍隊における指令と同じような強い言葉が使われています。イエス様は、ご自身がキリストであることを他の者たちに話さないように厳に命じられました。なぜか？キリストということ自体を、彼らは理解していないからです。そして、この方がキリストであるということを公にされて、次に語られることを成就しなければならなかったからです。十字架につけられて、三日目によみがえるという使命を果たされるのです。また、ヘロデはご自分の命を狙っています。時が熟していないのに殺されることがあってはなりません。極めて慎重に動かなければいけませんでした。

この時の弟子たちの思いは計り知れないものがあります。私たちキリスト者にとっては、十字架と復活こそがキリストの使命であるという悟りと告白を持っています。ですから弟子たちの受けた

衝撃について、理解するのがかえって難しいです。これからルカ伝において、イエス様は何度となくこのことをはっきりと語られます。けれども弟子たちは、それでも理解していません。どうしても、受け入れることのできない言葉であり、あまりにも衝撃で頭をよぎるだけで、忘れてしまうようなものだったのです。例えば、ガブリエルがマリヤにキリストを宿すことを告知した時に、イザヤの預言を意識して、ダビデの王座に着く方だと話しました。イザヤはこう話しています。「その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、とこしえまで。万軍の主の熱心がこれを成し遂げる。(9:7)」

キリストがユダヤ人指導者に受け入れられるのはもちろんのこと、ローマの支配から解放し、世界を正義と平和によって治め、エルサレムに王座を設けられるのです。これが来るものだと思っていました。ところが、ユダヤ人指導者、すなわちサンヘドリンの人々はイエスを拒み、ローマの手にイエスを渡すのです。そして、十字架で殺されるのです。こんなことが、あってはなりません。それでマタイ伝によると、ペテロが「そんなことはあってはなりません。」とイエス様を諫めたのですが、イエス様が、「下がれ、サタン」と言われました。神のことでなく、人のことを思っていると。私たちは良かれと思っで行なうことで、実は多くのことで人のことを思っていて、神のことを思っていないことがあります。

しかし、第一に、キリストがユダヤ人指導者に捨てられることは、預言の中に書いてあることでした。このことを成就しなければなりません。そしてイザヤ書 53 章には、それは人々の咎を取り除くため、身代わりに死ぬためであると書いてあります。第二に、イエスの力はローマを打ち滅ぼすこと以上の、とてつもない力と権威を持っておられるのです。「三日目によみがえる」のです。死を打ち滅ぼす力、これこそ全能の力、絶大な力があります。

9:23 イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。9:24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。9:25 人は、たとえ全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得があらましよう。9:26 もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします。

キリストの弟子としての大きな転換です。これまで弟子たちは、キリストの力と権威を見ました。それによって神の国が広がる姿を見ました。しかし、この全能者であられるキリストが、いや居全能者であるからこそ、その力を退けてご自分を捨てる道を歩まれるのです。「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。(ピリピ 2:6-8)」

イエス様は度肝を抜くような発言をされました。「日々自分の十字架を負い」なさい、ということですから。当時の人でこのことの意味を知らない人はいませんでした。十字架刑に処せられるために、犯罪人はまず、自分が付けられる木を背負って歩かねばならないのです。それは、自分の権利や主張、自分の生きるための欲求を全て捨てた姿であります。ですから、イエス様は、「自分を捨て、日々自分の十字架を負いなさい」と言われています。さらに、「日々」それをしなさいと命じられます。一度限りのものではありません、自分というものが日毎に現われ出てきます、それを捨てて歩むのです。そうしなければ、キリストに付いていくことはできないということです。

イエスについていく、という人々は沢山います。群衆のように、イエスがすばらしい教師であり、自分たちの病を直す大預言者であると敬うことはできます。けれども、この方をキリストとして生きていくのであれば、そこには自分のこれまでのあり方をすべて捨てて、ただキリストに生きていただく決断をしなければいけません。

そして逆説的ですが、真実な言葉をイエス様は語られました。自分を捨てるという行為は、人間的には自殺行為に等しいです。世は自分を生かすために存在します。宗教でさえ、自分が向上するために存在します。しかし、その自分を降ろしなさいとイエスは命じられます。ゆえに、これまでの自分を失うのではないかと多くの人は恐れます。しかし、その道はかえって自分を失う結末に至ります。しかし、その反対に、自分を失うことを選び取った人は、キリストがその人を救ってくださいます。キリストが命をもってその人を生かしてくださいます。だから、むしろ生きることができるのです。その人の行き先は、永遠の命であり、死後の命であり、また死後の復活です。

そして、イエス様は物に対して、身軽に生きる道を教えられています。全世界を手に入れる、という大袈裟な言い方をされていますが、それは人が自分に与えられている物によって自分を生かしているからです。何を食べるか、何を着るか、そのようなことに思い煩いを持ち、それでイエスのところに来ようとはしません。しかし、かつてヨブが言ったように、私たちは裸で生まれ、また裸で帰るのです。命は財産にあるわけではありません。世に対して、身軽に生きていく、あまり真面目にならない、むしろ神の国とその義を第一に求めていき、このことに真剣になります。

そして 26 節、イエスは栄光の姿をもって実際に戻ってきてくださいます。弟子たちが待望していた、神の国は事実、その通りになります。しかし、まずイエスが人の罪を十字架で取り除かれて、死に対して打ち勝ち、それからこの世界を刷新されます。ですから、弟子たちは今、そのことを願うのではなく、むしろ御国に入るのにふさわしい生き方をしているのか、確かめながら生きていく必要があります。

これから、イエス様の弟子たちに対する教えの中で、イエスの証しを立てる時に人を恐れることがないように戒められます。世においては、福音は恥とされます。けれども、それでイエス様のことを恥ずかしいと思って、世に対して証しをすることを避けるなら、距離を取るのであれば、主が戻っ

てこられる時に、同じように恥だとみなされます。今、十字架を負う生活を歩む生活をしているかどうかによって、かの日に評価が決まるのです。

9:27 しかし、わたしは真実をあなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国を見るまでは、決して死を味わわない者たちがいます。」

主が戻ってこられる時に、誰かがこの十二人の中で生き残っているのか？と私たちは誤解してしまいます。事実、使徒ヨハネは長生きしていたので、人々から主が戻ってくるまで死なないという噂が広まっていました。ヨハネはそれを福音書の最後のところで否定しています(21:23)。ここは、そういう意味ではありません。28節以降を読めば、イエスが栄光の姿に変えられるのをペテロ、ヤコブ、ヨハネが目撃します。神の国の姿、その前味を得るのです。